

称名思想の源流

— パーリ聖典を中心にして —

畝 部 俊 英

目 次

序 論	2
(1)	2
(2)	3
本 論	7
I. 韻文における「称讃する」意をあらわす動詞の意味・用法	7
(1) 『経集 (Sutta-nipāta)』	8
(2) 『法句経 (Dhammapada)』	9
(3) 『相应部 (Saṃyutta-nikāya)』・ 「有偈品 (Sagātha-vagga)」の韻文	11
(4) 『長老偈 (Thera-gāthā)』・ 『長老尼偈 (Therī-gāthā)』	13
(5) 『长部 (Dīgha-nikāya)』 経典の韻文	14
(6) 『増支部 (Aṅguttara-nikāya)』 経典の韻文	15
(7) 要 結	17
II. 散文における「称讃する」意をあらわす動詞の意味・用法	21
(1) 『长部』 経典の散文	21
(2) 『中部 (Majjhima-nikāya)』 経典の散文	22
(3) 『相应部』 経典の散文	24
(4) 『増支部』 経典の散文	26
(5) 要 結	27
結 論	30

序 論

(1)

浄土教における称名思想を『無量寿経』⁽¹⁾に限定して考察してみると、『観無量寿経』・「下品上生」⁽²⁾や「下品下生」⁽³⁾段などに見られる「衆生たちが阿弥陀仏の名号を称えて、救いにあずかること」というような、「衆生の称名」ではなく、「釈迦・諸仏が阿弥陀仏の名号を称讃する」という「諸仏の称名」で貫ぬかれていることが知られる⁽⁴⁾。更に、梵文『無量寿経』において、この「称讃する」という意味で用いられている *pari-√kirt* という語を、他の初期大乘経典の梵文に求めて調査し、検討してみても、やはりほとんど主語は釈迦や諸仏であり、覚者たちが自からさった法やさとることによって見出したさとりの世界とそこに住する仏・菩薩たちを、その名前、功德、力、色、形などによって「称讃して説く」、すなわち法に対する「諸仏の称讃」の意で用いられていることが判明する⁽⁵⁾。したがって『無量寿経』における「諸仏の称名」は、恐らく初期大乘経典に共通して認められる、法に対する「諸仏の称讃」の思想を背景にして生れてきたものであると思われる⁽⁶⁾。

以上のことは、すでに一連の拙論で述べてきたのであるが、次に問題となってくるのは、この初期大乘経典の「諸仏の称讃」の思想が、初期仏教を伝承する経典に源流が認められるか、どうかである。釈尊が菩提樹下において正覚され、言葉によって法を説かれたことが、すなわち法に対する称讃であるから、初期経典そのものが「仏陀・釈尊による法の称讃」で貫ぬかれていることになるが、「諸仏の称讃」の源流と認められるような具体的用例を取り出すことができるであろうか。もし取り出すことができるとすれば、それはどのような意味・用法をもつものであろうか。もとより、初期仏教における諸仏は、例外的用例とせられるものも報告せられている

称名思想の源流

が⁽⁷⁾、ほとんど過去・現在・未来という三世の諸仏で、大乘經典で説かれている現在他方仏国土に同時に存在する諸仏ではないから、「諸仏の称讚」と類同する表現が初期經典に認められてもただちに大乘經典における「諸仏の称讚」と同一視することはできないかもしれない。しかし、これまで諸先学の方々が、浄土教における称名思想の源流を、『観無量寿經』にもとづいて「衆生たちが阿弥陀仏の名号を称えて、救いにあずかること」というような「衆生の称名」の延長線上のみで、時にはそれを念仏思想と結びつけて、初期經典に求めてこられたのに対し、『無量寿經』にもとづいて「釈迦・諸仏が阿弥陀仏の名号を称讚する」という「諸仏の称名」の視点から称名思想を考え直すことができるのではないかという課題をもって⁽⁸⁾、漢訳阿含經典に比べて、原語がより明らかに区別して取り出せるパーリ聖典によって、「諸仏の称名」の背景である「諸仏の称讚」の源流となるものを尋求してみたい。

(2)

『無量寿經』における「称名」の「称」は、すでにくつつかの拙論で明らかにしてきたように、「称讚する」という意味の語であり、その典型的な用例として、17番目の本願文、いわゆる第17願を上げることができる。

設我得仏，十方世界無量諸仏，不悉咨嗟称我名者，不取正覚。⁽⁹⁾

(設い我仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、悉く我が名を咨・嗟・称せずんば、正覚を取らじ。)

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, nāprameyeṣu buddhakṣetreṣv aprameyāsaṁkhyeyā buddhā bhagavanto⁽¹⁰⁾ nāmadheyam parikīrtayeyur, na varṇaṁ bhāṣeran, na praśaṁsām abhyudīrayeyur, na samudīrayeyur, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksambodhim abhisambudhyeyam.⁽¹¹⁾

称名思想の源流

(世尊よ、たとい私がさとりを得たととしても、もしも無量の仏国土における無量・無数の諸仏・世尊たちが (buddhā bhagavanto) [私の] 名号を称讃せず (na parikīrtayeyur), 讃歎を説かず (na varṇaṁ bhāṣeran), 讃辞を宣揚せず (na praśaṁsām abhyudirayeyur), 高揚しない (na samudirayeyur) ようであるならば、その間は、私はこの上ない正しいさとりをさとりません。)

シナ訳と梵文を対照して上げたのであるが、シナ訳の「咨・嗟・称」が梵文のいずれの語にそれぞれ対応するかは不明としても、梵文で知られるように、すべて「称讃する」という意味の動詞であり、主語は「諸仏・世尊たち」である。梵文『無量寿経』全体では、釈迦・諸仏が阿弥陀仏の名号を「称讃する」という意味の動詞からの変化語は、

- (1) pari-√kīrt
- (2) varṇaṁ√bhāṣ
- (3) praśaṁsām abhy-ud-√ir
- (4) sam-ud-√ir
- (5) yaśaḥ pra-√kāś
- (6) guṇam ud-√ir
- (7) varṇaṁ√ghuṣ
- (8) √varṇ
- (9) √stu
- (10) pra-√śaṁs

を語根とする語としてあらわされているが、パーリ聖典ではどうであろうか。調査してみると、およそ次のような動詞の種々なる変化語が、「称讃する」意をあらわす語として用いられている。

- (1) abhikitteti
- (2) abhitthavati
- (3) abhitthunati
- (4) abhithometi
- (5) abhivaṇṇeti

称名思想の源流

- (6) ukkaṃsati (或いは ukkaṃseti)
- (7) kitteti
- (8) thavati
- (9) thunati
- (10) thometi
- (11) pakitteti
- (12) parikitteti
- (13) parivaṇṇeti
- (14) pasāṃsati
- (15) vaṇṇaṃ karoti
- (16) vaṇṇaṃ bhaṇati
- (17) vaṇṇaṃ bhāṣati (或いは vaṇṇe bhāṣati)
- (18) vaṇṇaṃ vadati
- (19) vaṇṇeti
- (20) saṃkitteti
- (21) saṃvaṇṇeti
- (22) santhavati
- (23) samukkaṃsati
- (24) sampakitteti ⁽¹²⁾

これらのうち、(12) の parikitteti という語が、先ほど上げた梵文『無量寿経』における「称讚する」という意をあらわす(1)から(10)までの語の中心となって用いられている pari-√kirt と対応するのであるが、『譬喩経 (Apadāna)』⁽¹³⁾ と『ミリンダ問経 (Milindapañho)』⁽¹⁴⁾ に数回出てくる程度であるので、パーリ聖典、特に初期仏教の思想⁽¹⁵⁾ を伝承していると見られる、いわゆる初期経典において「称讚する」という意味の動詞が、どのように用いられているかを考察する手がかりとしては十分ではない。したがって、ここに上げた(1)から(24)までの動詞のうち、初期経典を中心に、主な意味・用法を調べてみることにする。調べるについて、諸先学によるこれまでの初期仏教経典成立史研究の成果に基いて厳密に古層

称名思想の源流

から順次検討していくのが妥当であろうが、本論稿では、南方上座部所伝のパーリ聖典のうち、いくつかの經典を、歴史的変遷の影響は受けているけれども、南方上座部として体系的また具体的に今日まで初期仏教の思想を伝承してきたものとして扱い、これを大きく二つに分け、初めに韻文を取り上げ、『経集』、『法句経』、『相応部』・「有偈品」の韻文、『長老偈』・『長老尼偈』、『長部』經典の韻文、『増支部』經典の韻文を検討し、次に散文に移り、『小部』經典以外の四つのニカーヤ（部）の散文における「称讚する」意をあらわす動詞の意味・用法を検討したい。

序論の註（敬称は略す）

- (1) 以下『無量寿経』とのみあらわす場合は、シナ訳（『大正蔵』12巻、265頁—279頁）、梵文、チベット訳の『無量寿経』の総称として用いる。
- (2) 『大正蔵』12巻、345頁下段。
- (3) 『大正蔵』12巻、346頁上段。
- (4) 拙稿「梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応—特に称名と聞名に関して—（上）」（『同朋仏教』第5号所収）。
- (5) 拙稿「『阿弥陀経』読解（下）」（『同朋仏教』第12号所収）。
- (6) 拙稿「『無量寿経』における称名思想」（『日本仏教学会年報』第44号所収）。
- (7) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』365頁—372頁参照。ただし、主語が諸仏であり、動詞が現在形であらわされていても、それがただちに現在多仏を認める用例となるかどうかという問題が残る。動詞が現在形であっても歴史的現在の用法であれば、やはり三世の諸仏を意味することになるからである。本稿で取り上げる「智者たち」や、「賢者たち」の場合、「この世における一部の有識の人たち (idh' eke viññujātikā)」, 「賢者たちは、この世で彼を称讚する (pañḍitā idh'eva nam pasamsanti.)」というようにあらわされているが、「諸仏」もこのようにあらわされている用例があるであろうか。これについては、別稿で機会を得て検討を加えたいと思つている。
- (8) これまで諸先学の方々が、真宗の宗学以外では、ほとんど「衆生の称名」の観点のみから称名思想を取り上げていられるので、特に「諸仏の称名」を明らかにしたいのであるが、「衆生の称名」を称名思想として認めないわけではない。「衆生の称名」については、別の視点から検討すべきであり、その点につ

称名思想の源流

いては若干、拙稿「『無量寿経』における称名思想」の「Ⅱ 衆生の称名」の項以下で触れておいたが、機会を得て更に文献にもとづいて思想的展開の上で考究したいと思っている。

- (9) 『大正蔵』12巻, 268頁上段。ただし「咨」は「諮」とある。
- (10) 藤田宏達訳『梵文和訳, 無量寿経・阿弥陀経』所収「梵文補正表」に従って、訂正する。
- (11) Atsuuji Ashikaga, *Sukhāvativyūha* (以下, *Sukh.* と略称する), p. 13, II. 17—21. 以下, ローマナイズされたサンスクリット及びパーリ文は, 依用するテキストのままに取り出してあるので, 不統一な個所がある。
- (12) 以上の語の出典は, 繁雑となるので省略する。Pāli Tipiṭakaṃ Concordance 既刊分などを参照されたい。ただし, 以下, 本稿で扱う『経集』をはじめとする經典における「称讃する」意をあらわす語の出典は, すべて明示する。
- (13) *Apadāna* (II) (*Khuddakanikāya*, vol. VII., *Nālandā-Devanāgarī-Pāli-Series*), p. 243. ここでは,

tadā so dhammakathikaṃ bhikkhuniṃ parikittayaṃ, ṭhapesi
etadaggamhi taṃ sutvā muditā ahaṃ.

(その時, 彼 (= 仏陀) は説法比丘尼を称讃され (*parikittayaṃ*), その第一〔位〕に置かれた。それを聞いて私は喜悅した。)

とあり, 「称讃した」というのは, 仏陀が「称讃して説いた」という意味であって, 梵文『無量寿経』の *pari-√kirt* と同じような意味・用法である。

- (14) *Milindapañho* (PTS. 本), p. 131, 114, 230, 383. *Milindapañho* では, 主語は必ずしも仏陀ではなく, 極く普通の「称讃する」意をあらわしているようである。
- (15) 「初期仏教」の呼称については, 三枝充徳『初期仏教の思想』に詳細に述べられているが, 筆者も従来, 「原始仏教」と呼ばれてきた範囲 (下限は, 上座部・大衆部の根本分裂まで, すなわち仏滅百年ごろまで) を一応「初期仏教」とし, 初期仏教の思想を伝承していると思われ, これまでの諸先学の方々も認めていられる經典を初期仏教經典, 略して初期經典と呼ぶ。

本 論

I. 韻文における「称讃する」意をあらわす動詞の意味・用法

まずパーリ聖典における韻文を取り上げて, 「称讃する」という意味の動詞の意味・用法を検討してみよう。

(1) 『経集 (Sutta-nipāta) 』

『経集』では、

- (1) kitteti ⁽¹⁾
- (2) thavati ⁽²⁾
- (3) thunati ⁽³⁾
- (4) thometi ⁽⁴⁾
- (5) parivaṇṇeti ⁽⁵⁾
- (6) pasamsati ⁽⁶⁾
- (7) vaṇṇeti ⁽⁷⁾

という動詞からの変化語によって「称讃する」意があらわされているが、主な用例を見てみよう。

Akittayi vivaṭacakkhu sakkhi dhammaṃ parissayavinayaṃ, paṭipadaṃ vadehi, bhadante*, pātimokkhaṃ atha vā pi samādhim. ⁽⁸⁾

* PTS. 本の脚注に従う。

(眼を開いた人は、自証の法・厄難の調伏を称讃された (akittayi)。尊者よ、道を説いてください (vadehi)。戒条や或いは三昧も〔説いてください〕。)

これは921頌であるが、この場合の「称讃された (akittayi)」は、次の「説いてください (vadehi)」と同じく「説く」という意味であるが、「眼を開いた人」、すなわち五眼を具えた仏陀が説く場合には、自からさとした法 (ここでは「自証の法 (sakkhi dhamma)」を「称讃して説く」) ので、akittayi ⁽⁹⁾ という語であらわしている。『経集』では、同じような用例が、875, 935, 1052, 1053, 1066の各頌に認められるが、必ずしも仏陀が称讃して説く場合のみに限定されているわけではない。

称名思想の源流

Pabbajjaṃ kittayissāmi, yathā pabbaji cakkhumā, yathā
vīmaṃsamāno so pabbajjaṃ samarocayi. ⁽¹⁰⁾

(眼ある人はどうして出家されたのか、どう考えて彼は出家を喜ばれたのか、
〔彼の〕出家を〔私は〕称讃しよう (kittayissāmi)。

これは405頌であるが、この場合の「称讃しよう (kittayissāmi)」も「称讃して説こう」の意であるが、説く者は仏陀ではない。このような用例を『経集』から上げると、227, 658, 984, 1046, 1132の各頌に見出される。

次に、以上の用例と違ひ、この世のすぐれた人々が「称讃する」場合の例として、294頌を上げることができる。

Tassa vattam anusikkhantā idh' eke viññujātikā brahma-
cariyaṃ ca sīlaṃ ca khantiṃ cāpi avaṇṇayurū.

(彼の禁戒を学んだ、この世における一部の有識の人たちは、梵行と戒と忍辱とを称讃した (avaṇṇayurū)。

序論(1)で触れたように、初期仏教では現在同時に存在する諸仏は、原則としては認められてはいない⁽¹¹⁾。そこで、この例のように「この世における一部の有識の人たち」という表現で、初期大乘經典の現在同時に存在する「諸仏の称讃」に相当する意をあらわしているように思われるが、これについては、後に他の經典における用例と共に検討してみよう。

(2) 『法句経 (Dhammapada)』

『法句経』では、「称讃する」という意味の動詞は *pasāṃsati*⁽¹²⁾ という語であらわされている。梵文『無量寿経』の(10) *pra-√śarṇi* に相応する語であるが、パーリ聖典全体において、「称讃する」意をあらわす動詞の中で、最も中心的に用いられている語である。

称名思想の源流

Appamādena Maghavā devānaṃ seṭṭhataṃ gato. Appamā-
daṃ pasaṃsanti. Pamādo garahito sadā. ⁽¹³⁾

(マガヴァー(インドラ神)は不放逸によって神々の最勝者となった。不放逸を〔人々は〕称讃する(pasaṃsanti)。放逸は常に非難される。)

これは30頌であるが、ここでは「非難される(garahito)」の反対語として「〔人々は〕称讃する(pasaṃsanti)」が用いられている。このうち、

appamādaṃ pasaṃsanti.

(不放逸を〔人々は〕称讃する。)

の部分は、『相応部』・「有傷品」⁽¹⁴⁾、『増支部』・Ⅲ.⁽¹⁵⁾、『如是語經(Itivuttaka)』⁽¹⁶⁾では、

appamādaṃ pasaṃsanti puññakiriyāsu paṇḍitā.

(賢者たちは福德の行における不放逸を称讃する。)

というように、主語が「賢者たち(paṇḍitā)」であらわされている。

次に、『法句経』229と230は一連の頌であるが、ここでは「智者たち(viññū)」、「神々(devā)」、「梵天(Brahmā)」が「称讃する」の主語となっている。

Yaṃ ce viññū pasaṃsanti anuvicca suve suve acchiddavuttiṃ
medhāviṃ paññāsīlasamāhitāṃ, ⁽¹⁷⁾

(もし智者たちが日々判断して「この人は行いに欠点がなく、賢明であり、智慧と戒と定心がある」と称讃するならば(pasaṃsanti),)

Nekkhaṃ jambonadasseva ko taṃ ninditum arahati?

Devā pi naṃ pasaṃsanti, Brahmunā pi pasaṃsito. ⁽¹⁸⁾

(ジャンブー河産の〔金でつくられた〕装身具〔のごとく〕であって、誰が彼を非難することができるであろうか? 神々も彼を称讃する(pasaṃsanti)。梵天によってでも称讃される(pasaṃsito)。)

称名思想の源流

336 頌にも「袖々が称讚する (*devā pasamsanti*)。』という個所があるが、229 頌の「智者たちが称讚する」とあるのを含めて、これは先の『経集』294 頌のうちの「この世における一部の有識の人たちは、梵行と戒と忍辱とを称讚した。」という表現の仕方と共に、称名思想の源流を考える場合、注目すべき用例のように思われる。

ところで、『法句経』における「称讚する」という語は、『経集』と同じように、すぐれた人々や袖々が「称讚する」場合だけに用いられているわけではない。177 頌の中では、否定形ではあるが、

bālā have nappasamsanti dānaṃ.

(愚かな人たちは布施を称讚しない。)

というような個所もある。

(3) 『相応部 (*Samyutta-nikāya*)』・「有偈品 (*Sagāthavagga*)」の韻文

パーリ聖典の中にあつて、古層に属するものとせられている『相応部』の「有偈品」において「称讚する」という意味の動詞は、『法句経』の場合と同じくもっぱら *pasamsati* ⁽¹⁹⁾ という語であらわされている。

.....
*Yo dhammacārī kāyena, vācāya uda cetasā,
idh-eva nam pasamsanti, pecca* sagge pamodati.* ⁽²⁰⁾

* *pacca* を訂正する。

(身と口と或いは心で如法の行いをなす人は、この世では彼を〔人々は〕称讚し (*pasamsanti*)、死して後は天界において〔彼は〕楽しみを受く。)

先ほど上げた『法句経』30頌のうちの「不放逸を〔人々は〕称讚する」という個所は、『相応部』・「有偈品」、『増支部』・Ⅲ、『如是語経』におけ

称名思想の源流

る一句では「賢者たちは福德の行における不放逸を称讃する」と「賢者たち」という主語であらわされていたが、同じ『相應部』・「有偈品」の、この個所では「この世では彼を〔人々は〕称讃し……、」と、主語はあらわされていない。

ところで、この「この世では彼を〔人々は〕称讃し、死して後は天界において〔彼は〕楽しみを受く。」という個所は、『相應部』・「有偈品」にもう1個所、『如是語経』に1個所、『増支部』経典では5個所に見出され、主語があらわされているものと、いないものがある。例を上げてみよう。先ず「賢者たち (paṇḍitā)」という主語のある『相應部』・「有偈品」の場合。

Yo mātaraṃ pitaraṃ vā, macco dhammena poseti,
tāya naṃ paricariyāya, mātāpitūsu paṇḍitā,
idh-eva naṃ pasaṃsanti, pecca sagge pamodati. ⁽²¹⁾

(人が如法に父母を養えば、父母に対するその給仕の故に、賢者たちはこの世では彼を称讃し、死して後は天界において〔彼は〕楽しみを受く。)

次に主語のない『如是語経』の場合。

Tāya naṃ pāricariyāya mātāpitūsu paṇḍito,
idheva naṃ pasaṃsanti pecca sagge pamodati. ⁽²²⁾

(賢者は父母に対するその給仕の故に、この世では彼を〔人々は〕称讃し、死して後は天界において〔彼は〕楽しみを受く。)

『増支部』の5個所は、「賢者たち」という主語があるもの2例⁽²³⁾、主語のないもの3例⁽²⁴⁾、である。主語があるか、ないかは、metre の関係によるのであろうが、いずれにしても、この世で多くの人々や賢者たちに称讃されるという表現であることでは共通している。

『相應部』・「有偈品」には、主語が「聖者たち (ariyā)」である場合

も、4 個所⁽²⁵⁾、同じような表現で見出される。

.....
koddhassa visamūlassa, madhuraggassa devate,
vadhā ariyā pasāmsanti⁽²⁶⁾,

(女神よ、毒の根であり、最上の甘味である忿怒の破壊を聖者たちは称讃する (pasāmsanti)。

このほか、「ナムチ (悪魔の名) によって称讃せられた (Namuci-ppasatthā)」⁽²⁷⁾ とか、「善逝 (または、善逝たち) によって称讃せられた (Sugatappasattham)」⁽²⁸⁾ という表現も注意される。

(4) 『長老偈 (Thera-gāthā)』・『長老尼偈 (Therī-gāthā)』

『長老偈』・『長老尼偈』は、仏弟子たちによって詠まれた詩句集として伝承せられてきたもので、仏説ではないが初期仏教の文献としては欠かすことのできないものであるので、次にこれを取り上げてみる。「称讃する」という意をあらわす動詞は、およそ次の語よりの変化語である。

- (1) kitteti⁽²⁹⁾
- (2) pasāmsati⁽³⁰⁾
- (3) vaṇṇeti⁽³¹⁾

先ず kitteti は『長老尼偈』の 271 頌と 274 頌に見出される。271 頌は普通の意味での「称讃する」であるが、274 頌を取り上げてみよう。

cirassam vata man tāta samaṇānam paripucchasi,
tesam te kittayissāmi paṇḍāsīlaparakkamaṃ.

(ああ、父よ、めずらしく私に沙門たちのことを問うてくださった。あなたに彼等の智慧と戒と努力を〔私は〕称讃いたしましょう (kittayissāmi)。

称名思想の源流

この「称讃いたしましう」は、父の問いに対して答えるのであるが、「称讃して説く」ことによって答えるのである。

paññavantaṃ tathāvādiṃ sīlesu susamāhitaṃ cetosamathasamhyuttaṃ tañ ca viññū pasamsare.

(智慧があり、真実を語り、もろもろの戒において心がよく定まっていて、心の寂靜に達した者、彼を智者たちは称讃する (pasamsare)。

これは『長老偈』の 1077 頌であるが、「智者たちは称讃する」という表現が見出される。この 1077 頌以外の pasamsati と vaṇṇeti の用例は、いずれも過去受動形であらわされ、「聖者たちによって愛好され、称讃せられた (ariyakantaṃ pasamsitaṃ)」⁽³²⁾、「仏陀 (または諸仏) によって称讃せられた (buddhavaṇṇitaṃ)」⁽³³⁾、「沙門たちやバラモンたちによって称讃せられるところではない (na vaṇṇitaṃ samaṇabrāhmaṇehi)」⁽³⁴⁾、「善人たちによって称讃せられた (sappurisehi vaṇṇitā)」⁽³⁵⁾、「牟尼によって……称讃せられた (muninā…… vaṇṇitā)」⁽³⁶⁾ というような表現が注意せられる。

(5) 『長部 (Dīgha-nikāya)』 經典の韻文

『長部』における韻文の中では、「称讃する」という動詞は、

(1) kitteti

(2) pasamsati

で、各一個所づつに見出される。

Pāṇātipāto adinnādānaṃ musā-vādo ca vuccati,

Para-dāra-gamaṇaṃ c'eva nappasamsanti paṇḍitā. ⁽³⁷⁾

(生き物を殺すこと、与えられないのに取ること、妄語が語られる [こと]、他人の妻に通ずることを賢者たちは称讃しない (nappasamsanti)。

主語は「賢者たち (paṇḍitā)」であり、「称讚しない」は「称讚して説かない」, 「非難する」という意味であろう。

.....
Deva-kāyā abhikkantā te vijānātha bhikkhavo,
Ye vo'haṃ kittayissāmi girāhi anupubbaso. ⁽³⁸⁾

(天族たちが近づいた。比丘たちよ、彼等を知れ。彼等を私はもろもろの語をもって順序正しくあなたたちに称讚しよう (kittayissāmi)。)

釈尊が「称讚しよう」といわれるのは、これもまた「称讚して説く」の意である。

次に、『中部』と『相応部』(「有偈品」を除く)の韻文では、他のニカーヤに見出される、同じような詩句以外、特に「称讚する」という語はないようである。

(6) 『増支部 (Aṅguttara-nikāya)』 經典の韻文

『増支部』の韻文では、次の三つであらわされている。

- (1) kitteti ⁽³⁹⁾
- (2) pasāmsati ⁽⁴⁰⁾
- (3) vaṇṇeti ⁽⁴¹⁾

kitteti の用例は1個所であり、「ナーガ (= 仏陀) をあなたたちに〔私は〕称讚しよう (Nāgaṃ vo kittayissāmi, ...)。」とあらわされているが、これは『長老偈』693 頌である。pasāmsati の用例のうちのあるもの(『増支部』・I., p. 8, 29, III., p. 47)も、『法句経』230頌と同文であったりして、『増支部』独自の韻文に、「称讚する」意の動詞を見出し難いのであるが、次のように、「非難する」という動詞と対比して、「称讚する」意の動詞が用いられている用例が注意される。

三三三

Appassuto pi ce hoti silesu asamāhito ubhayena nañ garahanti silato ca sutena ca. Appassuto pi ce hoti silesu susamāhito silato nañ pasamsanti nāssa sampajjate sutam. ⁽⁴²⁾

(もし〔法を〕少ししか聞かず、もろもろの戒に心がよく定まっていない者があるならば、戒と聞との二つによって彼を〔人々は〕非難する (garahanti)。もし少ししか聞かずとも、もろもろの戒に心がよく定まっている者があるならば、戒で彼を〔人々は〕称讃する (pasamsanti)、彼の聞は充分ではない〔が〕。

Bahussuto pi ce hoti silesu asamāhito silato nañ garahanti tassa* sampajjate sutam. Bahussuto pi ce hoti silesu susamāhito ubhayena nañ pasamsanti silato ca sutena ca. ⁽⁴³⁾

* P T S. 本脚注に従う。

(もし〔法を〕多く聞いても、もろもろの戒に心が定まっていない者があるならば、戒で彼を〔人々は〕非難する (garahanti)、彼の聞は充分である〔が〕。

もし多く聞いて、もろもろの戒に心がよく定まっている者があるならば、戒と聞との二つによって彼を〔人々は〕称讃する (pasamsanti)。

ここでは、「非難する」と「称讃する」に、直接主語があらわされていないが、次のような例もある。

.....
Tāya adhammacāriyāya mātāpitūsu paṇḍitā
Idh'eva nañ garahanti peccāpāyañ ca gacchati. ⁽⁴⁴⁾

(父母に対するその非法の行いの故に、賢者たちはこの世では彼を非難する (garahanti)。そして死して後は〔彼は〕苦界に行く。)

.....
Tāya nañ dhammacāriyāya mātāpitūsu paṇḍitā
Idh'eva nañ pasamsanti pecca sagge pamodati*. ⁽⁴⁵⁾

* pamodanti を訂正する。

称名思想の源流

(父母に対するその如法の行いの故に、賢者たちはこの世では彼を称讃する (pasamsanti)。死して後は天界において〔彼は〕 楽しみを受く。)

この二つは、既に述べたように⁽⁴⁶⁾、『相応部』・「有偈品」に2個所、この『増支部』の韻文に5個所、『如是語経』に1個と類同する頌があるうちの、『増支部』の2個所であるが、「非難する」と「称讃する」の主語は「賢者たち (paṇḍitā)」である。

この『増支部』には、主語が「福德について熟知している諸仏はこの祭祀を称讃する (Yaññam etaṃ pasamsanti buddhā puññassa kovidā.)」⁽⁴⁷⁾の「諸仏」とか「正観者たちは称讃する (vaṇṇayanti vipassino.)」⁽⁴⁸⁾の「正観者たち」であらわされている場合もある。

(7) 要 結

以上、『経集』、『法句経』、『相応部』・「有偈品」の韻文、『長老偈』・「長老尼偈」、『長部』経典の韻文、『増支部』経典の韻文における「称讃する」意をあらわす動詞の意味・用法を見てきた。

これによって知られることを列挙してみよう。

(1) パーリ聖典全体では、「称讃する」意をあらわす動詞は、本稿の初めに上げたようにおよそ24種を数えるが、韻文経典では、kitteti, pasamsati, vaṇṇeti の3種よりの変化語が多く、特に pasamsati が最も多く用いられている。

(2) 「称讃する」ということは、単に「称讃する」という意味をあらわしている場合と「称讃して説く」という意味をあらわしている場合がある。

(3) 「称讃する」という動詞の主語は、悪魔「ナムチ」とか出家以前の女性の一人称単数「私」である場合もあるが、次のような主語であらわされているものがある。

a) 眼を開いた人 (vivaṭacakkhu)

- b) 眼ある人 (cakkhumā)
- c) この世における一部の有識の人 (idh'eke viññujatikā)
- d) 動詞が三人称複数形であるので、仮りに「〔人々〕」と補って訳される場合
- e) 賢者たち (paṇḍitā)
- f) 智者たち (viññū)
- g) 神々 (devā)
- h) 梵天 (brahmā)
- i) この世における賢者たち (paṇḍitā idha)
- j) 聖者たち (ariyā)
- k) 善逝 (sugato), または善逝たち (sugatā)
- l) 仏陀 (buddho), または諸仏 (buddhā)
- m) 善人たち (sappurisā)
- n) 牟尼 (muni)
- o) 私 (= 釈尊, aham)
- p) 私 (= 仏弟子, [aham])
- q) 正観者たち (vipassino)

(4) このような主語、特に複数形の主語によって「称讃する」意があらわされている用例が見出されるのであるから、これは初期大乘経典における「称讃する (pari-√kīrt)」意をあらわす動詞の主語が釈迦・諸仏であるのと対応させて考えてよいのではなかろうか。初期仏教においては、現在同時に存在する多仏を認めないので、諸仏とあっても、三世の諸仏をあらわすものと一般的には考えられるが、現在多仏に代わるものとして、「賢者たち」、「智者たち」、「聖者たち」という表現で、この世のすぐれた人々によって称讃される意をあらわすのである。特にたびたび見出される「賢者たちがこの世で彼を称讃する (paṇḍitā idh'eva naṃ pasamsanti)。」

称名思想の源流

とか、『経集』に1例ではあったが「この世における一部の有識の人たちは……称讃した (idh'eke viññujātikā …… avaṇṇayum.)。』という表現が、これを明らかにあらわしていると思われる。

(5) したがって、この世におけるすぐれた人たちが称讃するという意が、このように初期經典の韻文に見出されることは、初期大乘經典の「諸仏の称讃」の思想の背景または源流として認めてよいと思われる。

以上の五点で要約してみたが、更に『小部 (khuddaka-nikāya)』以外の4つのニカーヤの散文において、「称讃する」意をあらわす語について検討してみよう。

本論 I. の註

- (1) Sutta-nipāta (PTS. 本, 以下 S n. と略称する), 405頌, 875頌, 921頌, 935頌, 984頌, 1052頌, 1053頌, 1066頌, 1132頌。
- (2) S n., 217頌。
- (3) S n., 884頌。
- (4) S n., 679頌, 1046頌。
- (5) S n., 226頌。
- (6) S n., 227頌, 658頌。
- (7) S n., 294頌。
- (8) S n., 921頌。
- (9) Mahāniddeśa (p. 354) では、この頌を釈して、次のように述べている。
Akittayī vivaṭṭacakkhū ti. Akittayī ti akittayī parikkittayī ācikkhi desesi paññāpesi paṭṭhapesi vivari vibhajī uttānim akāsi pakāsesi ti, akittayī. Vivaṭṭacakkhū ti Bhagavā pañcahi cakkhūhi vivaṭṭacakku,
- (10) S n., 405頌。
- (11) 本稿の「序論の註」(7) 参照。
- (12) Dhammapada (PTS. 本, 以下 Dh. と略称する), 30頌, 177頌, 228頌, 229頌, 230頌, 366頌。
- (13) Dh., 30頌。
- (14) Saṃyutta-nikāya (PTS. 本, 以下 SN. と略称する), I., p. 87, 89。

称名思想の源流

- (15) *Aṅguttara-nikāya* (PTS. 本, 以下 AN. と略称する), III., p. 48.
- (16) *Itivuttaka* (PTS. 本), p. 16.
- (17) Dh., 229頌。
- (18) Dh., 230頌。
- (19) SN. I., p. 21, 22, 23, 41, 47, 67, 87, 89, 102, 149, 152, 161, 169., 182, 183.
- (20) SN. I., p. 102.
- (21) SN. I., p. 182.
- (22) *Itivuttaka*, p. 111.
- (23) AN. I., p. 132, II., p. 5.
- (24) AN. II., p. 69, III., p. 46, 78.
- (25) SN. I., p. 41, 47, 161, 237.
- (26) SN. I., p. 41.
- (27) SN. I., p. 67.
- (28) SN. I., p. 21.
- (29) *Therī-gāthā* (PTS. 本, 以下 Thig. と略称する), 271頌, 274頌。
- (30) *Thera-gāthā* (PTS. 本, 以下 Thag. と略称する), 507頌, 1077頌。
- (31) Thag., 538頌, 554頌, 1124頌, Thig., 213頌。
- (32) Thag., 507頌。 cf. SN. I., p. 232, SN.V., p. 384, 405, AN.II., p. 57.
- (33) Thag., 538頌。
- (34) Thag., 554頌。
- (35) Thag., 1124頌。
- (36) Thig., 213頌。
- (37) *Dīgha-nikāya* (PTS. 本, 以下 DN. と略称する。), III., p. 182. cf. AN. II., p. 71.
- (38) DN. II. p. 256.
- (39) AN. III., p. 346.
- (40) AN. I., p. 132, AN. II., p. 3, 7, 8, 19, 29, 44, 69, AN. III., p. 46, 47, 48, 78.
- (41) AN. II., p. 63, AN. IV., p. 244.
- (42) AN. II., p. 7.
- (43) AN. II., pp. 7-8.
- (44) AN. II., p. 5.

- (45) AN. II., p. 5.
- (46) 本稿, 11-12頁。
- (47) AN. II., p. 44.
- (48) AN. IV., p. 244.

II. 散文における「称讚する」意をあらわす動詞の意味・用法

(1) 『長部』経典の散文

『長部』経典では、次のような動詞の変化語によって「称讚する」意があらわされている。

- (1) ukkaṃseti ⁽¹⁾
- (2) kitteti ⁽²⁾
- (3) thometi ⁽³⁾
- (4) paṣaṃsati ⁽⁴⁾
- (5) vaṇṇaṃ bhaṇati ⁽⁵⁾
- (6) vaṇṇaṃ bhāsati ⁽⁶⁾ (或いは, vaṇṇe bhāsati ⁽⁷⁾)
- (7) vaṇṇaṃ vadati ⁽⁸⁾
- (8) vaṇṇeti ⁽⁹⁾

これらのうち「智者たちによって称讚せられた (viññuppasatthā)」⁽¹⁰⁾ というような、既に韻文の中に見てきた用例や、「凡夫が如来を称讚して語る (puṭhujjano tathāgatassa vaṇṇaṃ vadamāno vadeyya.)」⁽¹¹⁾ というような、仏陀やすぐれた人たちではない者が、主語である場合もあるが、今までの韻文の用例では見られない、釈尊が名前を (nāmāni) 称讚するという散文の用例を見出す。

Ācikkhissāmi bhikkhave devakāyānaṃ nāmāni, kittayissāmi bhikkhave devakāyānaṃ nāmāni, desissāmi bhikkhave devakāyānaṃ nāmāni. Taṃ suṇātha sādhukaṃ manasikarotha, bhāsissāmi. ⁽¹²⁾

称名思想の源流

(比丘たちよ、〔私=釈尊は〕諸天族の名を(nāmāni)告げよう(ācikk-hissāmi)。比丘たちよ、〔私は〕諸天族の名を称讃しよう(kittayissāmi)。比丘たちよ、〔私は〕諸天族の名を説示しよう(desissāmi)。それを聞け、よく思念せよ。〔私は〕説こう(bhāsissāmi)。

ここでは、「告げよう」、「称讃しよう」、「説示しよう」と並列的に表現せられていることから知られるように、「称讃しよう」は「称讃して説こう」の意であるが、「名を称讃しよう」という言い方が注意せられる。韻文では、この世におけるすぐれた人たちが称讃するという表現に、初期大乘經典の「諸仏の称讃」の思想の背景または源流となるものを見出すことができるのであるが、この散文では、「名によって称讃する」という用法が認められるのである。

(2) 『中部(Majjhima-nikāya)』經典の散文

『中部』經典では、次のような「称讃する」意をあらわす動詞からの変換語が上げられる。

- (1) abhitthavati ⁽¹³⁾
- (2) ukkaṃsati ⁽¹⁴⁾ (或いは ukkaṃseti ⁽¹⁵⁾)
- (3) kitteti ⁽¹⁶⁾
- (4) pasāṃsati ⁽¹⁷⁾
- (5) vaṇṇaṃ karoti ⁽¹⁸⁾
- (6) vaṇṇaṃ bhāsati ⁽¹⁹⁾
- (7) samvaṇṇeti ⁽²⁰⁾
- (8) samukkaṃsati ⁽²¹⁾

『長部』經典の散文に見られる名前によって称讃して説くという用例が『中部』・116である『仙吞経(Isigillisuttam)』という經典にも認められる。

称名思想の源流

Ācikkhissāmi, bhikkhave, Paccekabuddhānaṃ nāmāni;
kittayissāmi, bhikkhave, Paccekabuddhānaṃ nāmāni; desis-
sāmi, bhikkhave, Paccekabuddhānaṃ nāmāni. Taṃ suṇātha,
sādhukaṃ manasikarotha; bhāssissāmi. ⁽²²⁾

(比丘たちよ、〔私＝釈尊は〕諸独覚の名を告げよう。比丘たちよ、〔私は〕
諸独覚の名を称讃しよう (kittayissāmi)。比丘たちよ、〔私は〕諸独覚の名
を説示しよう。それを聞け、よく思念せよ。〔私は〕説こう。)

これは「諸天族の名」となっていた『長部』の個所が、この『中部』経
典では「諸独覚の名」となっているだけの違いであるが、次のような韻文
の個所へと20数行置いて続く。韻文は、本論 I. の所で取り扱うべきであ
るが、同一經典の散文に続いている用例であるので、ここに出す。

Tesaṃ visallānaṃ naruttamānaṃ nāmāni me kittayato
suṇātha. ⁽²³⁾

(彼等、矢(すなわち煩惱)のない、最上の人たち(=諸独覚)の名を私
(=釈尊)が称讃するから(kittayato)、聞け。)

この「最上の人たちの名を私が称讃するから」というのは、次に多くの
すぐれた独覚者の名前が上げられているところから見ても、名によって、
「称讃して説くから」の意である。この名によって称讃して説く場合、先
ほど取り上げた『長部』の散文、『中部』の散文、この韻文といずれも、
「聞け」とあるのが注意せられる。シナ訳『無量寿経』のいわゆる第17、
18願成就文に相応する梵文『無量寿経』の個所⁽²⁴⁾を思い起こさせる。そ
こでは「諸仏の称名」が「それは何故であるか(tat kasya hetoḥ)。」とい
うことばを中間にはさんで、「衆生の聞名」と呼応しているのである⁽²⁵⁾。 二
一
四

Atha ca paṇāyaṃ bhavaṃ purisapuggalo diṭṭhe va dhamme
viññūnaṃ pāsaṃso. ⁽²⁶⁾

称名思想の源流

(しかも実にこの尊者である人間は、現法において智者たちに称讃せらるべき者である (pāsaṃso)。

既に見てきた韻文においては、「この世における一部の有識の人たち」とか「賢者たちはこの世で彼を称讃する」というように、この世におけるすぐれた人たちが「称讃する」意が表現せられていたが、ここでは「現法において智者たちに称讃せらるべき者 (diṭṭhe va dhamme viññūnaṃ pāsaṃso)」という言い方であらわされている。

Uḷārāya khalu bhavaṃ Vacchāyano samaṇaṃ Gotamaṃ
pasamsāya pasamsatīti. — Ko cāhaṃ bho ko ca samaṇaṃ
Gotamaṃ pasamsissāmi, pasatthapasattho va so bhavaṃ
Gotamo, seṭṭho devamanussānaṃ ti. ⁽²⁷⁾

(〔バラモンが問う〕「しかるに尊者ヴァッチャーヤナは沙門ゴータマを大いなる称讃をもって称讃する (pasamsati) の〔ではない〕か」と。
〔ピローティカ答う〕「尊者よ、私を誰〔と思うの〕か、またいかにして〔私が〕沙門ゴータマを称讃できようか (pasamsissāmi)、かの尊者ゴータマは称讃せられる者たちのなかの称讃せられる者であり、神々と人間たちの最上なる者である」と。)

ここでは、謙遜の言い方ではあろうが、「いかにして〔私が〕沙門ゴータマを称讃できようか (pasamsissāmi)」と、称讃することは、すぐれた人たちや仏陀でなければならず、私のような者ではとうてい称讃することは不可能であるということを示している。

(3) 『相応部』経典の散文

『相応部』経典の散文では、次のような「称讃する」意をあらわす動詞よりの変化語が見出される。

(1) abhitthavati ⁽²⁸⁾

(2) thometi ⁽²⁹⁾

称名思想の源流

- (3) *pasamsati* ⁽³⁰⁾
- (4) *vaṇṇaṃ bhaṇati* ⁽³¹⁾
- (5) *vaṇṇaṃ bhāsati* ⁽³²⁾
- (6) *vaṇṇeti* ⁽³³⁾
- (7) *saṃvaṇṇeti* ⁽³⁴⁾

『相應部』経典の散文では、特に取り上げて、検討する用法は認められないが、次のような個所がある。

Āyasmā hi Sāriputto bhagavatā anekapariyāyena thomito vaṇṇito pasaṭṭho. ⁽³⁵⁾

(長老舎利弗は、世尊によって種々の方法でほめられ (thomito)、讃嘆され (vaṇṇito)、称讃された (pasaṭṭho)。

「称讃された」という意を *thomito*, *vaṇṇito*, *pasaṭṭho* という三つの過去受動分詞であらわして、これらが同義異語であることが、言うまでもないことではあるが、知られる。また次のような用例もある。

Ayaṃ kho āyasmā Ānanda satthu ceva saṃvaṇṇito sambhāvito ca viññūnaṃ sabrahmacārīnaṃ. ⁽³⁶⁾

(この長老阿難は、師に称讃され (saṃvaṇṇito)、智者たち・同梵行者たちに尊敬されている。)

ここでは、師すなわち釈尊に「称讃されている」と智者たちに「尊敬されている」とが対比してあらわされているが、『長老偈』690頌を見ると、

yaṃ manussā namassanti sabbadhammāna pāraguṃ devāpi taṃ namassanti, iti me arahato sutarṃ.

(一切の事がらの彼岸に達した〔仏陀〕を人々は敬礼する、神々も彼を敬礼する、ということを私は阿羅漢から聞いた。)

称名思想の源流

とあるが、人々や神々が「敬礼する」ということと「称讃する」ということは、身業と口業と違うけれども、意味内容の上ではほとんど同じことをあらわしているように思われる。とすれば、ここの「智者たち・同梵行者たちに尊敬されている」(意業)といういい方も、「称讃されている」という意味内容とそれほど差があるとは思われない。

(4) 『増支部』 経典の散文

『増支部』 経典の散文では、

- (1) abhitthavati ⁽³⁷⁾
- (2) ukkaṃseti ⁽³⁸⁾
- (3) pasāṃsati ⁽³⁹⁾
- (4) vaṇṇaṃ bhaṇati ⁽⁴⁰⁾
- (5) vaṇṇaṃ bhāsati ⁽⁴¹⁾
- (6) vaṇṇeti ⁽⁴²⁾
- (7) saṃvaṇṇeti ⁽⁴³⁾

という語によって「称讃する」意をあらわす。「智者たちによって称讃された (viññuppasatthā, viññuppasatṭhehi など)」という表わし方以外に、次のような用例がある。

Attā pi attānaṃ na upavadati, anuvicca viññū pasāṃsanti, kalyāṇo kittisaddo abbhuggacchati, asammūḷho kālaṃ karoti, kāyassa bhedaṃ param maraṇā sugatīṃ saggāṃ lokāṃ upapajjati. ⁽⁴⁴⁾

(自からが自からを誇らない、〔その人を〕知って、智者たちが、称讃する (pasāṃsanti)、〔智者たちが称讃すれば、自然と世間に〕好い評判があがる、〔その人は〕心顛倒しないで命終する、身体破壊して死後、善趣天界に生れる。)

これは、浄信のない人 (apāsādika) における五失に対し、浄信の人 (pāsādika) における五徳であるが、ここでは、智者たちが称讚することによって、世間に好い評判があがり、心顛倒せずに命終し、死後天界に生れると述べられ、智者たちの称讚が天界に生れることと結びつけられている。

*Idha bhikkhave yassam parisāyam bhikkhū gihinam odāta-
vasanānam sammukhā aññamaññassa vaṇṇam bhāsanti asu-
ko bhikkhu ubhato-bhāga-vimutto asuko paññāvimutto
ti: Ayam vuccati bhikkhave āmisagarū parisā no
saddhammagarū.* (45)

(比丘たちよ、この世における、この衆会の中で、比丘たちが在家白衣者たちの面前でお互に称讚し (vaṇṇam bhāsanti)、ある比丘は俱分解脱である、ある者は慧解脱である、………と〔いう〕。………比丘たちよ、これは財を重んじ、正法を重んじない衆会といわれる。)

このように「称讚する」ということも、在家者たちの面前で、比丘たちが互いに称讚しあって、評判を得、利得をはかるようなことや、「自讚毀他」は厳しく戒められている。

(5) 要 結

以上、『小部』以外の、四つのニカーヤの經典の散文における「称讚する」意をあらわす動詞の意味・用法を検討してみた。韻文における意味・用法と対比してみると、次のような点が注意せられるであろう。

(1) 韻文經典で多く用いられていた *kitteti*, *paśamsati*, *vaṇṇeti* のうち、*paśamsati* は四つのニカーヤの散文でもよく出てくるが、*kitteti* は『長部』と『中部』經典だけに用いられ、*vaṇṇeti* は『中部』では用いられていない。それにかわり、*vaṇṇam bhāsati* という語句が四つのニカーヤすべてに見られ、特に『増支部』に多く出てくる。

称名思想の源流

(2) 「称讚する」という語の意味は、韻文と同じであり、単に「称讚する」という意味をあらわしている場合と「称讚して説く」という意味をあらわしている場合がある。

(3) 主語も韻文と同じく、「凡夫」である場合もあるが、仏陀や智者たちなどのすぐれた人たちであらわれている用例をいくつか取り出すことができる。『中部』経典には、「現法において智者たちに称讚せらるべき者」という用例もある。

(4) 韻文には見られなかった用例として、『長部』と『中部』の経典に、「〔私=釈尊は〕諸天族（『中部』では諸独覚）の名を称讚しよう」という箇所がある。名前によって「称讚する」ということは、韻文における「称讚する」という表現を、一步すすめているように思われる。

(5) この名前によって「称讚する」場合には、「聞け」という語句がついている。すぐれた人たちが「称讚する」ことは、人々がその称讚の言葉を「聞く」ことを前提としており、「称讚する」と「聞く」ことは呼応するものである。

(6) 『増支部』経典では、智者たちに称讚された者は、死後天界に生れると、智者たちの称讚は天界に生れることと結びつけられている用法もある。

本論 II. の註

- (1) DN. III., p. 42, 43, 46.
- (2) DN. II., p. 202, 204, 255, 268.
- (3) DN. I., p. 240.
- (4) DN. I., p. 163, 164, 165, DN. II., p. 80, 94, DN. III., p. 82, 83, 120, 187.
- (5) DN. III., p. 187.
- (6) DN. I., p. 1, 2, 3, 174.
- (7) DN. I., p. 117. なお, vaṇṇo bhāsito という用例もある (DN. III., p. 5.)

称名思想の源流

- (8) DN. I., p. 12, 22, 24, 28, 30, 32, 33, 36, 38, 39.
- (9) DN. III., p. 178.
- (10) DN. III., p. 82, 83, cf. DN. II., p. 80, 90.
- (11) DN. I., p. 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12.
- (12) DN. II., p. 255.
- (13) Majjhima-nikāya (PTS.本, 以下 MN. と略称する。), II., p. 146.
- (14) MN. I., p. 498.
- (15) MN. I., p. 192, 193, 194, 195, 196, 197, 200, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 524, II., p. 243, III., p. 37.
- (16) MN. I., p. 146, II., p. 65, 79, 80, III., p. 68, 69.
- (17) MN. I., p. 175, cf. II., p. 209.
- (18) MN. I., p. 387.
- (19) MN. I., p. 68-69.
- (20) MN. I., p. 110, 110-111, 111, 113, III., p. 195, 223, 225.
- (21) MN. I., p. 498.
- (22) MN. III., pp. 68-69.
- (23) MN. III., p. 69.
- (24) Sukh., p. 41, I. 25—p. 42, I. 8.
- (25) 拙稿「梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応—特に称名と聞名に関して—(下)」(「同朋仏教」第8号所収)参照。
- (26) MN. I., p. 404, 407, 409-410.
- (27) MN. I., p. 175. cf. MN. II., p. 209, AN. III., p. 237.
- (28) SN. I., p. 81, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195.
- (29) SN. II., p. 277, IV., p. 312, 313.
- (30) SN. II., p. 277, SN. IV., p. 272, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 339.
- (31) SN. I., p. 64, 65. ただし, vaṇṇe bhaññamāne とある。
- (32) SN. V., p. 320-321, 321, 354, 355.
- (33) SN. II., p. 277, III., p. 8, 9.
- (34) SN. IV., p. 93, 94, 95, 96, 98, 99, 101.
- (35) SN. II., p. 277. thomito, vaṇṇito, pasaṭṭho はすべて「称讚する」意をあらわすのであるが, 「ほめられ, 讚嘆され, 称讚された」とここでは区別して訳した。
- (36) SN. IV., p. 93, 94, 95, 96, 98, 99, 101.
- (37) AN. III., p. 239.

称名思想の源流

- (38) AN. II., p. 27, 28.
(39) AN. I., p. 58, 169, 188, 191, 194, 195, 196, 209, II., p. 7, 31, 57, 188, 191, 192, 193, III., p. 4, 5, 36, 78, 98, 132, 213, 237, 255, 267, 268, 286, 391, 392, IV., p. 157, V., p. 129, 130, 184, 190, 248.
(40) AN. I., p. 238, 239, III., p. 424, 425, IV., p. 30, 31.
(41) AN. I., p. 73, 74, 89, 226, II., p. 3, 84, 100, 101, 253, 254, 255, III., p. 139, 140, 141, 142, 264, 265, 266, 355, 356, IV., p. 179, 181, 346, V., p. 190, 306, 307, 308.
(42) AN. I., p. 69, II., p. 42, 43, III., p. 219, 220, IV., p. 87, 88.
(43) AN. V., p. 225, 226, 227, 229, 259.
(44) AN. I., p. 58, III., p. 255, 267, 268.
(45) AN. I., pp. 73-74.

結 論

序論 (1) で述べたように、称名思想を『無量寿経』に限定して考察してみると、「釈迦・諸仏が阿弥陀仏の名号を称讃する」という「諸仏の称名」で貫ぬかれている。このことを『無量寿経』以外の、いわゆる初期大乘經典について調べてみると、「諸仏の称名」は、「諸仏の称讃」の思想から出てきたものであることが知られる。以上のことを踏まえて、パーリ聖典の古層を伝承しているとせられている韻文と、『小部』以外の四つのニカーヤの散文を検討してみると、パーリの初期經典においても、「この世のすぐれた人たちが称讃する」という表現の用例がいくつかあり、散文の中には、「名によって称讃する」という用例も見出される。「諸仏の称讃」、そこから出てくる「諸仏の称名」の源流は、既に初期經典にあることを確認することができるように思う。

ところで、「この世のすぐれた人たちが称讃する」とか「名によって称讃する」という言い方と同じようなものは、『リグ・ヴェーダ』に認められる。とすれば、称名思想の源流は更に古く、また人類全体の神話や宗教の思想においても普遍的に見出されるものかもしれない。

(本学助教授・仏教学)